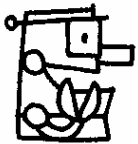


血液の成分は、どんなものが入っているの



血の赤い色のもとになる赤血球、^{さいきん}細菌と戦う白血球、
血をかためる血小板、水分などが入っているのさ。

人間の血液は、血しょうと、血球に分けられる

人間の血液を試験管に入れ、血がかたまるのを防ぐ薬を加えて置いておくと、赤い部分が下にしずみ、上のほうに黄色っぽいとう명한液があらわれます。

このとう명한液の部分は、血しょうとよばれ、およそ90%が水分で、残りは、タンパク質や、血をかためる材料などです。下にしずんだ赤い部分は、血球とよばれ、けんび鏡でみると、赤血球、白血球、血小板の3種類がまじっているのがわかります。

酸素の運び役は赤血球、細菌をやっつけるのは白血球

赤血球は、ヘモグロビンという赤い色素をもち、この色素は、酸素の多いところでは酸素とくっつき、酸素が少ないところでは酸素をはなす性質があります。そのため、肺で、吸いこんだ空気中の酸素をくっつけて体内に運び、酸素が少ない体の各部分では酸素をはなす、酸素の運び役をやっているのです。

白血球は、3つの中ではいちばん大きく、色がありません。体内に細菌が入ってくると、白血球は形を変えて、毛細血管から体内に出ていき、細菌をつつみこみ食べてしまいます。

血小板は、指を切ったりしたとき、いつまでも出血が続かないよう、血をかためて出血を止めるはたらきをします。

血液のこれらのはたらきで、わたしたちの体は守られ、酸素や栄養分を体内に配ってもらって、生きて活動できるのです。



ヘモグロビンがあるから、
血液は酸素を運べるのね。